



香りの小部屋

ハノイ

フェ
ダナン
ホイアン

ホーチミン

三百年以上前には日本街が存在したため、文化歴史博物館には日本とのゆかりの品々が展示されている。沈香とおぼしき物が



▲フエ王宮の青銅の扉に刻まれた伽藍木

扱っていないとのこと。ただ、この省では沈香樹の植林事業を行っており、今後五十年ほどすれば沈香を取り扱えるようになり、価格も安くなるらしいのだが、植林はこの省の秘密事項で、それ以上の話は聞けなかった。新しい沈香が出てきたらサンプルを送るとの事だった。寝台車とホテルのエアコンの効き過ぎが原因で、喉が痛くなり始めた。うっかり熱でも出して、SARSと間違われてはたいへんと、抗生物質と風邪薬を飲む。幸い熱は出なかった。

ホイアンは世界遺産にも登録された街で、三百年以上前には日本街が存在したため、文化歴史博物館には日本とのゆかりの品々が展示されている。沈香とおぼしき物が

ベトナム鉄道

途中下車の旅

編集委員 中田 泰三朗



★ 十三年振りのホーチミン

成田経由でホーチミンへ。夏休みの真最中なのに、SARSの影響なのか機内は空いている。簡単な入国手続きを済ませた後、宿泊先のコンチネンタルホテルに向かう。さすが観光都市を目指さず、以前宿泊したカラベルホテルはすっかり新しくなり、その横には高層のホテルも建ち並ぶ。翌日、とにかく沈香を求めて漢方薬市場がある中国人街チヨロンへ。店先に沈香の飾りを並べた漢方薬屋があったので中に入る。表に並んでいたのは、いかにも白い木に色をつけたような物だったが、ガラスケースの中から出してくれた沈香も同じような代物だ。これでも最近では中々手に入らないという。もう一軒、シクロで沈香屋を訪ねたが、期待のできるようなものは無かった。三時頃にスコールとなる。ホテルの向かいのカフェに入り、ビールを飲みながら



雨の街を眺める。コンチネンタルホテルの内部は、さすがに歴史とともに老朽化が目立つが、外からの眺めはなかなか情緒がある。少し早いがタクシ

ラステースに展示されていて、説明には「Angkor Wat」と書かれていたが、係の人に聞いても誰も詳しくは知らないようだ。ガイドブックでたまたま見つけたオーブンカフェに入る。勿論エアコンは無し。スープ、春巻き、焼きそばなど、ホイアンの名物料理がコースになって出でくる。ベトナムでは珍しくよく冷えたビールが出てきて、大変気に入った。しめて日本円にして約六百四十円也。店の真向いの船着場からは、オートバイ、自転車を満載した小さな船が頻りに出入りする。もう暗くなっているのに、電球の一つも付けずに暗闇の中を消えて行く。店内にはシャノンが流れ窓開きの良い店だった。タクシードナンに乗り、再び鉄道の旅へ。列車は満席だ。水、毛布、そして先日の入ったダンボールを足で蹴飛ばしながら配る風景は社会主義の列車らしい。暫く海岸沿いを走り、徐々にハイバン時

のリスミカルな振動を期待していたが、とにかく振動でうるさい。まるで旋盤工場の中にいるようだ。疲れのせいも、こんな騒音の中でもないっしかり眠ってしまった。ベトナムの朝は早い。六時頃には道路をオートバイ、自転車が列を成し、蒼然と走っている。国道を走るバスはいまだに屋根に大きな荷物を載せている。ダナンから海のシルクロードとして栄えたホイアンまでタクシード約四十分。ホテルにチェックイン後、Ong Thanh 省の農産物を主に取り扱っている公営会社を訪ねる。突然の訪問に、相手も最初は警戒気味であったが、話すうちに段々と友好的になってきた。沈香のことを聞くと、現在は政府が自生の沈香樹の伐採を禁止しているため、公社でも取り



サイゴン駅にて▶

へと高度を増して行く。頂上付近では歩いたほうが速いくらいのスピードになる。平坦地に下り、スピードが戻ってもトラック、バイクに抜かれて行く。それでもダナン一フエ間一〇三キロを、二時間四十分かけて走るベトナム屈指の特急列車だ。ホテルにチェックイン後、王宮へ。顕臨閣 (Thanh Lam Citadel) はフエの一番の見所。大きな青銅の扉にグエン王朝の特産物が彫られている。伽藍、沈香、桂、梅、虎、象などが描かれている。ホテルへはバイクタクシード帰る。スリルがあり、料金はUS\$1ドルと値打ちがあった。

◀のどかな漁の風景



翌日、フエ空港からホーチミン。シンガポールを経由して無事帰国。ベトナムではまだ個人旅行をするには少々足立を待たなければならない。飛行機等はほぼ遅れもなく快適に旅行が出来た。沈香については、情報の収集はなかなか難しいことを実感した。(終)